

湿地の価値

日本で最も大きな釧路湿原は、台地や丘陵に囲まれた盆地状の低平地の湿生草原地で、水と泥炭土とできている。低湿地帯に位置するため、死んだ植物は腐らず、泥炭層が形成されている。つまり、植物の死体が分解されずに積もって重なった広大な地域なのである。

夏の天気の良い日に訪ねると、緑は眩しく澄み、流れる水は美しい。見るからに豊かなところであり、植物もよく育ちそうで、穀倉地帯にならないかと夢を見た人がいた。

福土藩石川和助は安政三(一八五六)年から二年間蝦夷地を調査し、その際に根室から釧路に向かって歩行して「観国録」をあらわした。このあたりの海岸線は低

湿地帯であり、内陸から豊かな水量の川が流れ出している。夏の晴天の日など、まことにのどかな風景になる。葦が大湿地をかたちづくる厚岸の霧多布湿原のあたりになると、石川は感動的に筆を走らせるのである。

「^{すべ}都て^{このあたり}此辺左右前後平低の地は^{はんのき}蕪葭楊柳など^{おいしげ}生茂り、^{ひたち}水深くして^{いたこ}常陸の潮来などの^{こと}地方の如くなれば、^{すこぶ}頗る人力を費さされば農田を得べからず」

利根川のつくった霞ヶ浦の水郷地帯と、厚岸の低湿地の風景は同じだから、人の手さえ加われば水田ができるかといっている。夏の日を過ごしただけで結論づけるのは、まことにあさはかであるといわねばならない。当然のことながら、日照時間が絶対的に少なく、低温で

あることなど、考えもしなかった。まして冬の厳しさのことなど、考慮することはできなかったのである。釧路湿原については、石川はこう書きしるしている。

「^{ところ}墾田今日見る処の原野皆田と為す可し。小田蔵太云ふ^{すべ}惣て^{ざっくさいそし}雑穀菜蘇種等^{ところ}試むに^{もの}実さるる者なしと。只米は出来ぬと云ふ^な多年試みは^な猶可ならんか」

「小田蔵太」の意味が私にはよくわからないのだが、要するに石川は釧路湿原はすべて水田になると断言している。雑穀や蘇菜はできて米はつくれないという者もいるが、多年努力すれば稲も必ず育つと彼はいつている。もちろん表面の印象だけでここまでいい切るのは軽率であるのだが、現代に生きる私たちもこの石川のような発

想をまったくくしないかというところはいいきれない。

自分たちの価値観によってその自然を見てしまいがちなのである。幕末期の石川和助にとって、新田開発が最高の価値であったのだ。だから努力を惜しみさえしなければ、湿原は最高の価値の生まれるところと思いたしたのである。

現在の私たちは、湿原は生物を養う独特の環境であると知っていて、そのことに価値を見出し出している。湿原にはそこにしかない自然のメカニズムがはたらいているのだ。そのことに価値があるのであって、私たちの欲望を満足させるために湿原があるというわけではないのである。

立松和平 TATEMATSU Wahei

作家

経歴：1947年12月15日、栃木県宇都宮市で出生。早稲田大学政経学部卒業。

1970年、在学中に文学作品「自転車」で第1回早稲田文学新人賞を受賞。卒業後、土木作業員、運転手、魚市場の荷役などの職業を経験したあと、故郷に戻って宇都宮市役所に勤務した。

1979年から文筆活動に専念する。

1980年、小説「遠雷」で第2回野間文芸新人賞。

1986年、アジア・アフリカ作家会議の「85年度若い作家のためのロータス賞」

1983年、「卵洗い」で第8回坪田譲治文学賞。

1997年、小説「毒・風聞・田中正造」で第51回毎日出版文化賞受賞。日本国内/国外を問わず各地を旺盛に旅する行動派作家として知られ、活力あふれる描写とみずみずしい感性が多くの読者の共感を得ている。近年、とくに自然環境保護問題に取り組み、積極的に発言している。

2002年3月、歌舞伎座上演「道元の月」の台本を手がけ、第31回大谷竹次郎賞受賞。

最近の小説に「日高」新潮社、「猫月夜」河出書房新社、「木喰」小学館、「下の公園で寝ています」東京書籍、「道元」小学館、

エッセイ「新・おくのほそ道」(共著)河出書房新社、「聖徳太子」NHK出版、「命継ぎの海」佼成出版、

絵本物語「川のいのち」くもん出版、「酪農家族3」河出書房新社、「魚になった3兄弟」NHK出版などがある。

